

## 横断的アーカイブズ論研究会

八重樫 純樹

### I. 研究の経緯とその基盤

#### 1. 国立歴史民俗博物館における活動経緯

1982年4月から国立歴史民俗博物館（以降、歴博と略す）に勤務し、以来ずっと歴史学系人文科学系資料を対象とした情報システムそして情報化方法論の実践研究開発を遂行してきた。歴博は歴史研究部、民俗研究部、考古研究部、そして建築史学や美術史学等、極めて多様な文系分野・領域の研究・博物館活動を遂行する場であり、学際的研究を遂行する場でもあった。

#### 館内データベース共同研究開発

特に館内研究として進めたのは、考古学分野では古墳出土の「石釧・車輪石データベース」、「日本出土銅鏡データベース」等、民俗学分野では「日本民謡データベース」、歴史学分野では「荘園誌料データベース」、建築史学分野では「仏塔データベース」等であり、これらを具体的・整合的に収納可能なコンピュータシステムを千葉大工学部、千葉工大等の協力者有志と共同研究開発と合わせて遂行した。

データベースにすべき、あるいはデータベース化可能な情報は、その分野の大量情報の代表値、あるいは抽象値のみである。その情報の選定（情報集合と情報値）と枠組みの決定（スキーマ設計）はある程度、その対象についての知識が必要である。その点、きわめて広範囲な分野・領域の情報・知識について、深く勉強をさせていただいたと考える（文献(8)、(9)、(10)）。

#### プロジェクト共同研究活動

また、歴博は文部省の大学共同利用機関でもあり、他機関、他分野の研究者との学際的共同研究を遂行する場でもあり、多様な分野・領域の他機関の多様な研究者との自由な議論や考え方を学びつつ、研究の幅を広げ、推進することが可能であった。2期（1期3年間）に渡り代表者としてプロジェクト共同研究を遂行させて頂いた（『国立歴史民俗博物館研究報告』30集、37集、53集：国立歴史民俗博物館）。上記（1）の一部、そして縄文時代土偶データベース研究開発の発端もこの共同研究の一部であった。

#### 縄文時代土偶データベース研究開発

特に、人文科学が専門でもなかった私が、全国の考古学専門家の方々（「土偶とその情報」研究会）とプロジェクト研究として自主的に研究推進活動できた縄文時代土偶データベース研究開発は、その研究活動の中心であった。

（2）で述べたように、当初はプロジェクト共同研究テーマの一部であったが、昭和62年度（1987年）に文部省科学研究費が交付され、本格的な取り組みを行なった。「土偶とその情報」研究会を立ち上げ、全国約50名の考古学研究者に参加頂き、悪戦苦闘の末、データベース試行公開にやっとこぎつけたのは1995年であった。この過程で、わが国社会システムにおけるメディア管理、情報管理の本質的問題が見えてきた（2001年2月14日（水）、朝日新聞夕刊、文化欄）。そして、組織的なデータベース構築とは、協働作業による情報集成と情報共有による新たな知識の創生活動の実践的遂行の機会でもあったのだ。集成された良質な形式知を共有することにより、新たな暗黙知（研究情報）が創生されるのである。データベース公開以降は、この点に力点をおき、重要な時期・地域を6区分し、毎年シンポジウムを開催することにした。

#### 2. 静岡大学情報学部

##### （1）転勤後の土偶データベース研究開発

静岡大学に移ったのは1995年10月だったが、丁度、第1段階土偶データベース公開が終了し、縄文時代土偶データベース研究開発の最終まとめの段階に入った時期だった。先にも述べたように、情報共有による新たな暗黙知を、さらに形式知として社会・学会に公開する必要があった。このため、シンポジウム活動と、研究論文の刊行を遂行した。同僚教員の方々との新学部立ち上げの時期と重なり、一地方大学の風習や常識を知らないで活動しており、様々な忘れがたい事柄にもたびたび直面したものであった。しかし、この研究は私一人のものではなく、「土偶とその情報」研究会メンバーの支えで成り立っている研究であった。最後まで一つの纏まりが必須であり、創生された第2の暗黙知を社会化することを一番重要な課題として2000年まで、研究活動の中心として遂行した（文献(4)、(5)、(6)、(7)）。

##### （2）静岡大学キャンパスミュージアム活動から

静岡大学に転勤と同時に、本部の事務長から呼び出され、静岡大学キャンパスミュージアム構想を聞かされ、協力するように要請された。以降、この活動を遂行することとなった。理学部（主に地球科学系）・人文学部・教育学部（主に火山学）・農学部（主に植物のDNA分析）・情報学部の有志の教員との静岡大学キャンパスミュージアム活動立ち上げは共同研究として遂行することとした（文科省科学研究費もいくつか交付いただいた）。この活動は独立法人化した現在も活発に遂行している。この研究活動で、今まで人文科学系の資料の考え方以外に、自然科学系の「資料」についての考え方、そして研究方法等を学んだ。いままで、せいぜい日本の人間の歴史4～5万年からが対象であったが、地球の歴史47億年間が対象となってしまったのである。

### (3) 学部内の教育活動から

大学教育は一人ではできないのである。カリキュラムがあり、教育段階がある。同僚教員との共同作業の上で成り立つ。学年進行とともに、社会学系、メディア系教員との交流等あり、相互の戦うべき土俵を理解し、議論等を行なう上で、これらの分野・領域研究の知識獲得のための勉強が必要であった。歴史系博物館の世界のもの見方・考え方とは異なった、新たな幅広い視点が得られた。また、博物館の世界に対する客観的な見方が必要であることの認識を強く感じた。そして日本の博物館は、日本の社会活動のなかで、孤立・遊離してしまっていることを強く感じた。博物館がどうなろうと、社会は何等関心を持たないかもしれないし、その様な道筋を戦後の博物館はたどってきたのであろう（あるいは文化財行政か）。戦後の博物館活動の史的研究と、今後の新たな道筋設定が必要ではないかと考える。

### (4) 横断的アーカイブズ論研究へ

歴博時代は、文系専門外だったので、歴史学、民俗学、考古学等、それぞれ学問方法や考え方、領域は異なるにせよ（同じ分野でも個人によって考え方等異なる）、メディアとしての“資料”としては同じではないかと感じていた。学問の違いは“もの”として、またメディア情報性質の差異によっているのではないかと考え、歴博の最後の頃は、これらを明らかにするための資料情報モデリングと資料情報記録・管理の枠組みをしっかりとしなければならず、ここに力をいれていた。静岡大学に移ってからは、その意識がさらに強くなった。

また、資料の情報管理とは、資料情報記録作業が存在しなかったら情報管理などできるわけが無く、その前提論理としての“資料論”の規準が必要である。しかし歴史系各分野では資料認識のため“資料論”は必須であり、存在はするが、潜在化あるいは各個分散状態で、顕在化された論理は見当たらない。このことは長年神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科において非常勤講師をおこなって来て強く感じることであった。資料情報の記録管理は各分野で必要とされてきたが、分野バラバラの状況で、個別の活動に終始してきており、これらの総合化には各分野資料情報（メディアとして）の“差異”と“アナロジー”を明確にして行く作業が前提として必要であろうと感じていた。

たまたま、慶応大学文学部アートセンターで遂行しているCOE研究活動（鷲見先生、高山先生）から協力の声がかかり、そこで近畿大学の田窪先生、愛知県美術館の鯨井先生と一緒に、インターネットも世界的に普及し、いづれ広領域の横断的な情報資源アクセスが可能になることを話し合った。また、学生の教育・研究活動として、急速に進められている自治体等、公共機関の情報化に関する状

況把握も必要であり（情報社会学科が小生の所属学科）、学生の卒研等で進めていた。まずは、博物館・美術館・図書館をベースとした、そのための国内状況の調査・技術動向研究・国際化動向等を把握し、総合化する研究活動が必要であり、平成12年度に平成13年度～15年度の文部科学省科学研究費補助金の申請を行なった。

## II. 横断的アーカイブズ論研究

### 1. 「広領域分野資料の横断的アーカイブズ論に関する分析的研究」

（平成13～15年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）

（1）課題番号：13480102、代表：静岡大学八重樫純樹）

本研究は、インターネットによって狭くなった社会共有情報資源としての図書館情報、文書館情報、博物館情報を軸として、

- ・図書館、文書館、博物館の国内実態の調査と国際記録規準動向（各分野のメタデータ規準等）の調査・分析
- ・情報管理・情報流通技術動向の調査（次世代インターネット技術の動向調査：RDF、XML、オントロジー技術、CRMモデルの開発実験（鯨井担当））
- ・海外動向調査
- ・その他、国内自治体の動向等に関する調査・分析研究等をおこない、新たな知見と展望を得ることであった。以上の目的を遂行するため、以下の組織化を進めた。

#### 組織化

[研究代表者]

八重樫純樹 静岡大学情報学部・教授  
研究総括と資料情報モデリングの研究

[研究分担者]

高山 正也 慶応義塾大学文学部・教授  
多種分野資料の記録情報の比較研究

安藤 正人 国文学研究資料館・史料館・教授  
（現、（独法）人間文化研究機構アーカイブズ研究系教授）国文学研究史料アーカイブズの研究

田窪 直規 近畿大学・短期大学部助教授（現、教授）  
図書館資料アーカイブズの研究

水嶋 英治 科学技術館企画部・企画開発部・次長  
（現、常磐大学コミュニティ振興学部・教授）  
博物館資料アーカイブズの研究

鯨井 秀伸 愛知県美術館美術課・主任学芸員  
美術資料アーカイブズの国際比較研究とCRMモデルの開発実験

小川千代子 国際資料研究所・代表  
文書アーカイブズ論の国際比較研究

永村 真 日本女子大学文学部・教授  
日本史史料のアーカイブズ研究

島尾 新 東京国立文化財研究所・美術部・室長

(現. 多摩美術大学美術学部・教授)

美術資料のアーカイブズ研究

塚越 哲 静岡大学理学部・助教授

古生物資料のアーカイブズ研究

白井 靖人 静岡大学情報学部・助教授

情報システム化に関する研究

なお、上記研究分担者以外に、必要に応じて適切な専門家の指導・助言・専門知識を受けることができるように、研究協力者として適宜本研究に参加頂くこととした。

#### 主な研究活動

##### (2-1) 平成13年度の主な活動

メタデータ標準化(ダブリン・コア等)、マークアップ言語(XML等)、図書館(ISAD(G))、図書館(書誌情報記録やEAD)、博物館(ICOM-CIDOCやCRM)の国内外の実態動向のテーマを中心に、研究協力者の講演と議論等を通して研究を進めた。分野間相互、およびその研究動向について議論を進め、相互理解も深まった。これで研究の方向性は定まった。

① 研究会 : 上記テーマを中心に4回遂行した

② 海外調査等

・安藤正人氏がドイツにアーキビスト養成に関する調査研究。  
・小川千代子氏が世界のアーカイブ機関に関するアンケート実態調査を実施(ICA会長の後援)

・鯨井秀信氏がCRMのプロトタイプ実験開発開始。

##### (2-2) 平成14年度の主な活動

高山正也氏に分担者として正式に参加頂く。関連分野に積極的にアプローチするため特に、最前線で活動している若手研究者に協力頂き、ダブリン・コア動向、ISBDとFRBR、そして国内で研究開発中の横断検索データベース(国文学研究資料館中心)とグローバルデータベース(国際日本文化研究所中心)。またセマンティックWeb研究開発の世界動向であるRDFの国際動向について報告頂き、自由討議を重ね、我々が関連して諸分野の全体像が見えてきた。研究は飛躍的に向上した。また、国文学研究資料館・資料館と共催で12月に公開シンポジウム『情報社会とArchives-図書館・文書館・博物館をめぐって』を開催した。

① 研究会 : 4回遂行した。

② 海外調査等

・小川千代子氏の代理で牟田昌平氏(アジア歴史資料センター研究員)がICA円卓会議で発表。

・水嶋英治氏がイギリスおよびフランス博物館のドキュメンテーションに関する調査研究。

・鯨井秀伸氏が引き続きCRMプロトタイプの実験開発

③ 公開シンポジウムの開催

・12月24日。国文学研究資料館・史料館と共催で国文学資料館・史料館大会議室で、『情報社会とArchives-図書館・文書館・博物館をめぐって』を開催した。

##### (2-3) 平成15年度の主な活動

平成13~14年度研究活動で、

・当初、目的とした図書館、文書館、博物館の国際メタデータ規準の歴史・内容・動向・実態、そしてその“差異”と“アナロジー”が明らかとなってきた。

・小川千代子氏を中心とした世界のアーカイブ機関国際実態調査も纏まってきつつあり、初めてその実態を世界に報告できるまでに至った。

・ダブリン・コアの動向やISAD(G)、ISBD、ICOM-CIDOC、英国MDA等の動向と内容、その“差異”、“アナロジー”が明らかになってきた。

・データ流通のための記述言語XML、EADの動向が把握できた。

・さらに技術動向として、CRM、RDFの関係、世界情報資源共有化のためのこれらの動向が急速に進展しつつある実態を把握できた。

・ISO15489のJIS化の問題の進展が脚踏み状態で、かつわが国はそれに対応できるような体制にないことも明らかであり、この問題も社会的に明らかにする必要がある。

これらを踏まえ、我々が把握・分析した情報の社会的公開の必要性が緊急であるものと考えた。また、図書館、文書館、博物館以外に、現代資料アーカイブ(行政資料、特に電子政府、電子自治体の策定と自治体合併問題、企業資料(ISO15489問題)、映像音響資料等)へと研究の幅を広げる必要性を痛感した。

このため、その端緒として、9月開催を目標に公開シンポジウム『情報化・国際化のアーカイブ』を当初から計画した。研究会は従来の文脈で遂行した。

研究会 : 3回遂行した。9月2日に川口市にあるNHKアーカイブスを見学。

海外調査等

・小川千代子氏が南アフリカ、ケープタウン市で開催の第37回国際文書館評議会円卓会議に出席し、動向調査を行なった。公開シンポジウムの開催

・9月17日、静岡大学浜松キャンパス佐鳴会館で、公開シンポジウム『情報化・国際化のアーカイブ』を開催  
様々な課題

本研究の3年間で得られた新たな知見は非常に幅広く、深く、深刻なものがあつた。情報社会における基盤となるべき①情報技術基盤、②情報体制基盤、③情報資源基盤のうちわが国の③情報資源基盤は欧米に比べて極めて貧弱な実態にある。アーカイブズ体制あるいは資料の記録・管理体制を国家の様々な仕組みの中に打ちたてない限り情報資源基盤は成立しない。そして図書館、文書館、博物館、さらに現代社会に存在する各種行政資料や企業資料はその時期における社会活動の記録を残した資料であり、メデ

イアである。これらは社会的・国家的・民族的存在である。一部の機関や専門家の“もの”ではない。これら資料の“社会化”が管理・運用機関の責任であるものとする。情報化とはそのための最良の方策である。

自治体の電子化も県もバラバラに市町村もそれぞれバラバラに薦められており、少なくともわが国の博物館・文化財データ政策の無策同様に税金で進められている実態を卒研等で目の当たりにする。平成の大合併で、さらに無駄な税金かけて互換のためのソフト開発追加や、ポータルサイトコンテンツを作りなおす自治体が数多く存在するであろう。

丁度、本研究が終了した頃、中国、韓国における実態や計画等に関する情報が部分的に流入してきており、隣国である中国と韓国の実態調査をこの視点で行なう必要性を痛感した。

また、縄文時代土偶データベースも公開してから10年近い時間が過ぎ、考古学遺跡情報の問題とも併せて、新たなバージョンに設定する必要性を痛感していた。

これらの諸課題を踏まえて、次の段階のプロジェクト研究を計画した。

なお、本研究報告書(文献(1),(2),(3))は手元に数部しかなく、知り合いの研究分担者に相談頂きたい。

## 2. 「横断的アーカイブズ論の総合化・国際化と社会情報資源基盤の研究開発」

(平成16～19年度文科省科学研究費補助金基盤研究(B)、課題番号:17300081、代表:静岡大学八重樫純樹)

### (1) 計画の骨子

基本計画は平成15年度からあり、申請したが採択されず(申請窓口に注意を払わなかった)、平成16年度に、特に近隣の中国、韓国の実態調査の必要性を痛感し、計画を立て直して申請し、17年度4月に採択された。

この計画の基本骨子は以下である。

セマンティック Web (RDF) やオントロジー研究および CRM 技術系研究動向調査は今までの文脈で遂行する。

図書館、文書館、博物館の活動・国際メタデータ規準とマークアップ言語等の動向も従来文脈で調査研究を遂行。

行政(電子政府、電子自治体、合併問題による文書管理、コンテンツ統合問題)や企業資料、そして ISO15489 問題等も含めて研究を推進。

できたら、情報資源基盤研究開発として、どこかの自治体とタイアップして解決策、あるいはデファクトスタンダードモデルを開発する。

わが国の博物館資料情報化、そして情報記録・管理実態を調査・分析し、国際規格提案(ICOM-CIDOC)との対応分析を行なう(考古遺跡についても同様)。

韓国、中国の関係機関の実態・計画についての調査を遂

行する。

本研究で得られた新たな知見は学会論文はもちろんであるが、できるだけ速やかに公開シンポジウムを開催し、これを通して社会化してゆく。

その他

目標としては、前回の研究活動を踏襲し、前回できなかった部分の補強、そして実践性をより重視して進める計画である。なお、今回のメンバーは

- ・柴山 守氏(京都大学・東南アジア研究所・教授)
- ・牟田昌平氏(国立公文書館、アジア歴史資料センター・主任研究員)

- ・五島敏芳氏(国文学研究史料館・助手)

- ・古賀 崇氏(国立情報学研究所・助手)

に分担者として参加頂き、「横断的アーカイブズ論」研究会として研究遂行する体制とした。

### (2) 研究活動

平成17年度にはいり、

#### ①研究会

すでに5月と7月に2度に渡る研究会開催と、

#### ②講演会

7月16日に情報知識学会等との共催で講演会を開催した(京畿大学 チェ先生による「大規模韓国語によるオントロジー開発のためのシソーラスの構築」)

#### ③海外調査

・古賀崇氏が8月にストックホルムの国際学会発表と動向調査

・八重樫純樹、田窪直規、小川千代子、小笠原慶和(静岡大学研究生)が8月17日～8月21日まで、以下の韓国関係機関の情報化実態調査を行なった。

国史編纂委員会、国立中央図書館、韓国教育芸術情報院(KERIS)、国立民俗博物館、国立中央博物館

この調査の詳しい報告はいずれ別の機会に行なうが、韓国の情報政策は、情報通信省が中枢となっており、古文書情報、文化財情報、教育・学術情報、農業・水産情報、図書館情報等はそれぞれの機関で情報化を進めているが、それぞれの分野で国家メタデータ標準を決めており、このメタデータが情報通信省のサイトに集められ(コンテンツは各機関が保有)、利用者は情報通信省サイトからも、各機関サイトへ直接もアクセス可能としている。情報通信省では、すべてのメタデータが集成されているため、大規模なシステム変更やシステム開発などしなくても、国家規模の横断検索システムはいともたやすく可能である。

非常に重要であったのは、各分野で国家メタデータ標準を決定し、具体的に日常、それに則って情報記録・管理が進められていることであった。国立中央博物館の関係者から、文化財資料関係の電算化のための韓国国家記録標準の

マニュアルを頂いてきた(ハングル記述:全博物館がこれに則って、進めている)。いずれ、これらも早急にわが国に紹介しなければならないものと考えている。

韓国はデータ政策を設定してから情報化を進めており、非常に合理的であり、国家規模のシステムとして効果的かつ効率的システム構築が可能である。

- ・が、わが国で果たして可能であるのかどうか?
- ・そしてわが国の社会情報化の中心である総務省は一体どのようにデータ政策を考えて情報化を推進してきたのか?
- ・データベース構築はともかくとして、文化庁に文化財データ政策がそもそも存在していたのかどうか?

データ政策無策のまま e-Japan 構想は 2005 年度に完成するはずである。各省庁、そして総務省等政府の政策の見直しが必須と感じた調査であった。(1) の③、④、⑤において、検証して行く必要があるもの考える。

<参考文献>

(1) 八重樫純樹, 他:『平成 13~15 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(1)』

「広領域分野資料の横断的アーカイブズ論に関する分析的研究」(課題番号:13480102) 研究報告書(本編)、p. 238、2004・3

(2) " :『 " 』

(別冊 1:世界のアーカイブ機関-組織図集)、

(3) " :『 " 』(別冊 2:

世界の国立連邦文書館(アーカイブ)の調査-最終報告書)

(4) 「土偶とその情報」研究会編:『土偶研究の地平』

第 4 巻、勉誠出版社、p. 438、2000

(5) 「土偶とその情報」研究会編:『土偶研究の地平』

第 3 巻、勉誠出版社、p. 519、1999

(6) 「土偶とその情報」研究会編:『土偶研究の地平』

第 2 巻、勉誠出版社、p. 419、1998

(7) 「土偶とその情報」研究会編:『土偶研究の地平』

第 1 巻、勉誠社、p. 439、1997

(8) 八重樫純樹編・著:『国立歴史民俗博物館研究報告-共同研究「歴史系支援情報処理の研究-カタチの情報のデータ形成・索引法-」第 53 集、国立歴史民俗博物館、

p. 320、1993

(9) 八重樫純樹編・著:

『国立歴史民俗博物館研究報告-土偶とその情報-』第 37 集、国立歴史民俗博物館、p. 489、1992

(10) 八重樫純樹編・著:『国立歴史民俗博物館研究報告-共同研究「歴史系支援情報処理の研究-画像データを中心に-」第 30 集、国立歴史民俗博物館、p. 395、1991

(やえがし じゅんき 静岡大学情報学部) 

## ユネスコ「世界の記憶」プログラムの現状:

### 2005 年 IFLA オスロ大会より

古賀 崇

本学会が加盟している国際図書館連盟(International Federation of Library Associations and Institutions: IFLA) の 2005 年(第 71 回)年次大会は、8 月 14~18 日にノルウェー・オスロ市において開催された。筆者は科学技術振興機構の『情報管理』2005 年 10 月号において本大会の報告を行う予定であるが、この『アート・ドキュメンテーション通信』においては、本学会の活動につながりが深いと思われる、ユネスコ「世界の記憶(Memory of the World)」プログラムに関する報告を行いたいと思う。なお、この IFLA 大会では「美術図書館(Art Library)分科会も開催されたが、あいにく「世界の記憶」のセッションと時間帯が重なってしまったため、この紙面で報告ができないことをお詫びしたい。ただ、「美術図書館」分科会を含めた本大会の発表原稿の大部分がウェブ上で公開されているため、こちらをご参照頂ければ幸いである。

さて、「世界の記憶」に関するユネスコ・セッションは、8 月 14 日の午後に「オスロ・コングレスセンター(Oslo Kongressenter)」にて開催された。当日のプログラムは以下の通りで、議長は Bendik Rugaas 氏(元ノルウェー国立図書館長、元「世界の記憶」国際諮問委員会議長)が務めた。

・Aziz Abid(ユネスコ「世界の記憶」プログラム事務局)  
「世界の記憶:全体の概要」

・Jasmine Cameron(オーストラリア国立図書館副館長)  
「アジア・太平洋地域における世界の記憶」

・Alida Boye(オスロ大学)「アフリカにおける世界の記憶:トンブクトゥ文書」

・Celia Zaher(ブラジル国立図書館長)「ラテンアメリカ・カリブ地域における世界の記憶:奴隷貿易アーカイブズ・プロジェクト」

・Ekaterina Genieva(M. I. Rudomino 記念全ロシア外国文学図書館(モスクワ)館長) and Adolf Knoll(チェコ国立図書館副館長)「ヨーロッパにおける世界の記憶とユネスコ・直指賞」

・Deanna Marcum(米国議会図書館副館長、「世界の記憶」国際諮問委員会議長)「中国・麗江(Lijiang)における世界の記憶」